

将来予測について

21世紀末の予測：

気候変動に関する政府間パネル（IPCC）第5次評価報告書^{※1}で用いられた2つのシナリオ（RCP2.6とRCP8.5）に基づき、20世紀末と比べた21世紀末^{※2}の予測を記載しています。

RCP2.6シナリオ：

将来の世界平均気温が、工業化以前^{※3}と比べて約2℃上昇することが想定されているシナリオで、

「**2℃上昇シナリオ**」

と表記しています。

パリ協定の2℃目標が達成された世界に相当し、IPCC第6次評価報告書では、SSP1-2.6シナリオに近いものです。

RCP8.5シナリオ：

将来の世界平均気温が、工業化以前^{※3}と比べて約4℃上昇することが想定されているシナリオで、

「**4℃上昇シナリオ**」

と表記しています。

追加的な緩和策を取らなかった世界に相当し、IPCC第6次評価報告書では、SSP5-8.5シナリオに近いものです。

温暖化の程度に応じた予測：

20世紀末^{※2}では100年に一回の頻度で発生していたような大雨が、工業化以前^{※3}と比べて世界平均気温がそれぞれ**1.5℃、2℃、4℃**上昇した場合、どれくらいの頻度で発生するかを記載しています。なお、ここでは1日の降水量（日降水量）を解析しています。また、2℃上昇シナリオと4℃上昇シナリオにおいて、1.5℃、2℃、4℃それぞれの温度上昇が見込まれる、おおよその年代をそえて解説しています。

※1 最新のIPCC報告書は第6次評価報告書ですが、日本付近の予測で参照可能な結果の多くは第5次評価報告書に基づくためです。

※2 「21世紀末の予測」で用いる、20世紀末は1980～1999年（海面水温は1986～2005年）の平均、21世紀末は2076～2095年（同、2081～2100年）の平均です。「温暖化の程度に応じた予測」では、20世紀末は1981～2010年です。

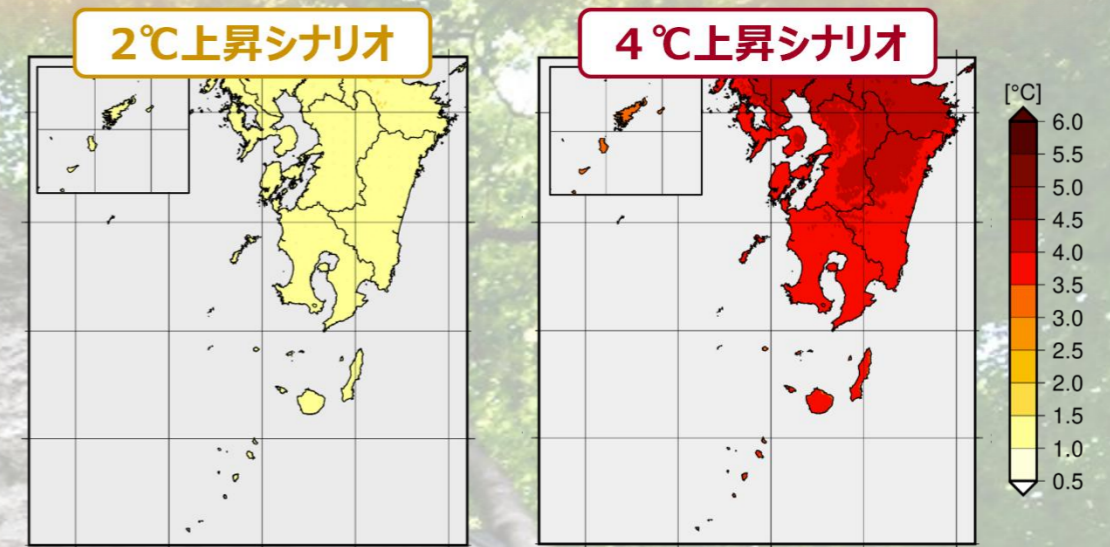
※3 工業化以前は1850～1900年の平均です。

宮崎県の気候変動

気温の上昇



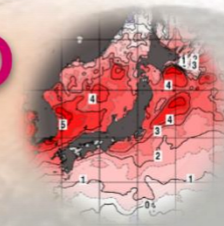
大雨の増加



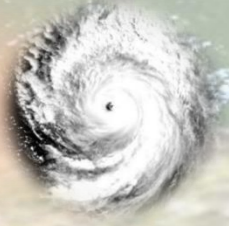
年平均気温の将来予測（21世紀末）

20世紀末からの上昇量（シナリオ等の詳細は裏面参照）
狭い領域の変化は不確実性が大きいので、都道府県程度の広範囲の変化に着目ください

海面水温の上昇



台風強度の増大



このリーフレットでは、「日本の気候変動2025」（文部科学省・気象庁）に基づき、これまでの気候の変化と将来予測に関する情報をまとめています。
九州南部・奄美地方の気候の変化については、気象庁ホームページからご覧いただけます。

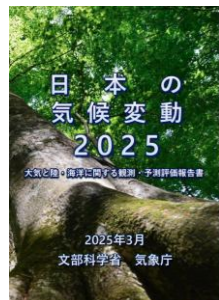


気象庁ホームページ「日本の各地域における気候の変化」

全国の情報はこちら

日本の気候変動2025

（文部科学省・気象庁、令和7年3月公表）



日本の気候変動の現状と予測に関する最新の知見を紹介

気象庁ホームページからご覧ください↓

解説動画はこちらから↓



気候変動の影響と適応

気候変動適応情報プラットフォーム

（A-PLAT（国立環境研究所））

気候変動は様々な分野に影響を及ぼします。具体的な影響やそれに対応するための適応策については、A-PLATも参照ください。



A-PLAT



A-PLATのホームページ

気候変動適応

検索



宮崎地方気象台 宮崎県宮崎市霧島5-1-4 TEL: 0985-25-4032

福岡管区気象台 福岡県福岡市中央区大濠1-2-36 TEL: 092-725-3614

令和7年3月

宮崎地方気象台・福岡管区気象台

気温の上昇



これまでの変化

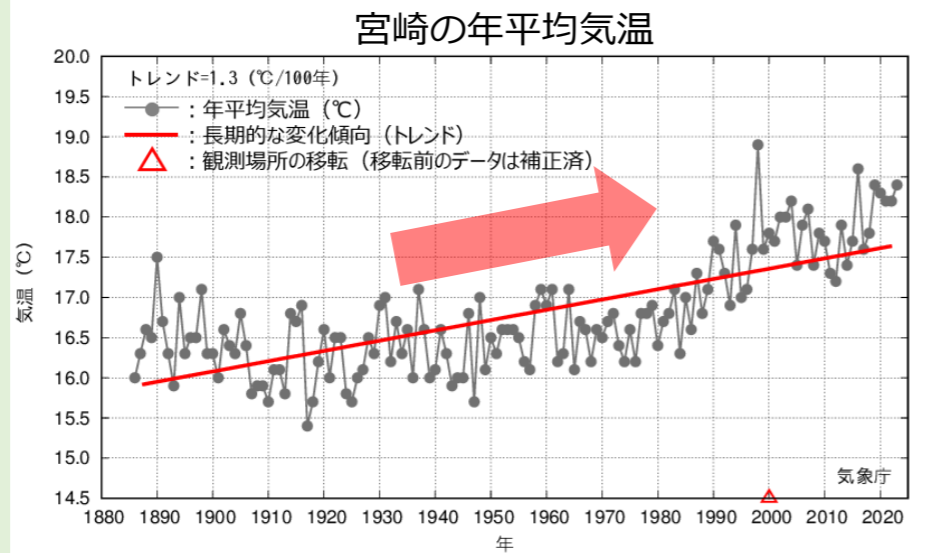
100年あたり
1.3℃上昇*

※右のグラフのデータから算出した
100年あたりの平均的な上昇率です。

最新の変化傾向は、
A-PLAT「気象観測
データの長期変化の
傾向」をご覧ください。



<https://adaptation-platform.nies.go.jp/data/jma-obs/index.html>



21世紀末の予測

熱中症等のリスク増加

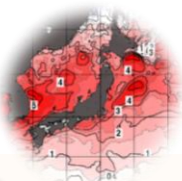
宮崎県の年平均気温は、20世紀末と比べて、
2℃上昇シナリオで約**1.3℃**、4℃上昇シナリオで約**4.0℃**上昇

年間猛暑日日数 2日 → **約5日 / 約26日**
年間熱帯夜日数 7日 → **約21日 / 約70日**

日数は左から、宮崎県平均の20世紀末の観測値、21世紀末 (2℃ / 4℃上昇シナリオ) の予測値

猛暑日は日最高気温が35℃以上の日です。
熱帯夜は夜間の最低気温が25℃以上の日を指しますが、ここでは便宜上、日最低気温が25℃以上の日を熱帯夜として扱っています。

海面水温の上昇

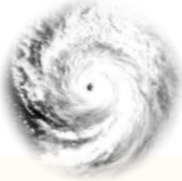


21世紀末の予測

四国・東海沖の年平均海面水温は、
20世紀末と比べて、
2℃上昇シナリオでは約**1.01℃**、
4℃上昇シナリオでは約**3.04℃**上昇

四国・東海沖が示す海域は、気象庁ホームページ「海面水温の
長期変化傾向(日本近海)」を参照ください。

台風強度の増大



将来予測^{※1}

日本付近の台風強度^{※2}は**強まる**
台風に伴う降水量も**増加**



※1 温暖化に伴う台風の変化を解析した様々な研究結果に基づきます。
※2 中心付近の気圧または風の強さ

大雨の増加



これまでの変化

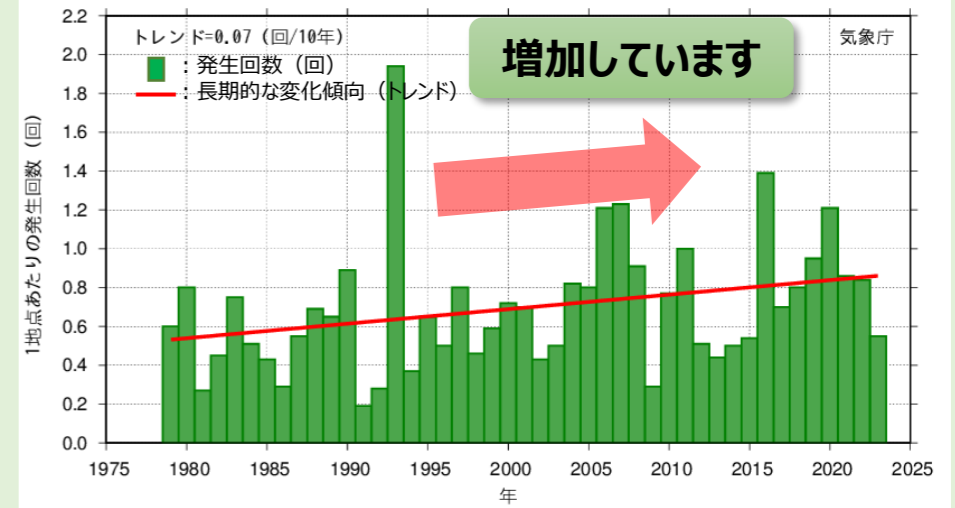
気象庁では、甚大な被害をもたらした「平成30年7月豪雨」には、地球温暖化に伴う水蒸気量の増加も影響したと評価しています。

最新の変化傾向は、
A-PLAT「気象観測
データの長期変化の
傾向」をご覧ください。

<https://adaptation-platform.nies.go.jp/data/jma-obs/index.html>



九州南部の1時間降水量50mm以上の回数



21世紀末の予測

傘は全く役に立たなくなるような降り方です

九州南部・奄美地方の1時間降水量50mm以上の年間発生回数は、
20世紀末と比べて、
2℃上昇シナリオでは約**1.7倍**、4℃上昇シナリオでは約**2.6倍**に増加

土砂災害や洪水等の災害リスク増加

各シナリオにおける
おおよその年代
2℃上昇シナリオ (SSP1-2.6)
4℃上昇シナリオ (SSP5-8.5)

温暖化の程度に応じた予測

20世紀末には100年に一回しか起こらなかった大雨^{※1}が**より頻繁に**

| 九州南部・奄美地方の予測 | 温暖化の程度 | | | |
|--------------|-------------|-------------|-------------|-------|
| | 1.5℃上昇 | 2℃上昇 | 4℃上昇 | |
| 20世紀末 | 2023-2042年頃 | ※2 | 2075-2094年頃 | |
| 100年当たりの発生頻度 | 2018-2037年頃 | 2032-2051年頃 | 2075-2094年頃 | |
| | 1回 | 約1.5回 | 約1.8回 | 約3.7回 |

観測データ^{※3}による推定では、
100年に一回の大雨 (日降水量)
は、宮崎では約430mmです。
温暖化が進むと、こうした大雨が
より頻繁に発生します。

※1 ここでは日降水量に基づく結果を示します。
※2 2031-2050年頃に2℃上昇となる可能性はあります。
※3 1976-2023年のうち利用可能な観測データです。

詳しい情報は、気象庁ホームページ「
「極端現象発生頻度マップ」をご覧ください。」

